横浜専門学校から神奈川大学に至る校地・校舎の変遷

津田良樹

はじめに

昭和三（一九二八）年三月に創設された横浜学院は、専門学校創立までの準備段階として設立されたものである。そのため校舎は、桜木会館（横浜市中区桜木町）の一・二階を借用した仮校舎であった。専門学校を創立するためには専用の校舎・校庭が必要であった。そこで同年八月、横浜市中区西戸部町富士塚（現、西区境之谷）に借地し、校舎が建てられた。それが横浜専門学校の最初の校舎・校庭である。校舎は同年十二月下旬に竣工し、十二月二十八日に横浜学院は富士塚に移転し、翌昭和四年三月三十日付で専門学校として認可され、横浜専門学校となった。ところが、昭和五年には早くも神奈川区六角橋に移転することになる。本報告では、一年ほどしか使われなかったが横浜専門学校最初の校地である富士塚校地、そして移転した六角橋校地の初期の様相について検討する。なお、建築図面は特に記さない場合は申請書添付図面および神奈川大学資料編纂室所蔵資料である。[1]

専門学校最初の校地

専門学校富士塚の校地（敷地）は現在の境之谷公園であったとされている。[2] 境之谷公園は、かつて市電が走っていた藤棚浦舟通（市道藤棚伊勢佐木線、主要地方道に指定）の西消防署境之谷出張所の交差点から急な坂道を上ったところにある。現在は西区境之谷であるが、昭和十年に町名変更になるまでは富士塚であった。かつての校地が現在の境之谷公園あたりであったことは既に知られているが、校地の範囲、校舎の位置などについては必ずしも明確にされているわけではない。そこで、専門学校申請書類に添付された図面や新旧公図、古地図などをもとに以下に検討してみたい。

図1が申請書類添付図面である。当時の地籍図を下敷きに校地の範囲と校舎位置などを示しているものと思われる。校舎が校地からはみ出たような配置になっているが、これは地籍図が必ずしも土地形状の実態を示していないことによるものと思われる。また、予定道路らしい、市電（境之谷）停留場からへの字に折れ曲がった直線的な「三間道路」が描かれ、この道路が校地に突き当たる箇所に門柱および門扉らしき絵が描かれている。[3] しかし、この「三間道路」は現在確認できず予定されただけで、実現されなかったようである。

図2は『中区火災保険図』№10「久保山方面」である。[4] 昭和五年三月十五日作成とあり、横浜専門学校が六角橋に移転する直前の様子を示しているものと思われる。南北に尾根筋を走る道路と町境（西戸部町・久保町境）の境界に挟まれた北側に落ちる崖上の平坦地に校舎の外郭が描かれ、その南側の空地に「横浜専門学校校庭」と註記されている。

図3の『南太田』（横浜三千分一地形図第三十六号）は昭和七年十一月測図である。専門学校が六角橋へ移転後の富士塚の様子を示している。校舎は既に無く校地跡地は平坦な舌状の空地となっており、校地跡地の地形がよく分かる。

図4は通称「和紙公図」である。昭和十年七月一日の町名変更にともない作成されたものと思われる。[5] そうだとすれば、図1より五年ほど後の作成であるが、それ以前の公図を引き写したものと思われ、図1の地籍に近い様子が描かれている。この地籍図上で校地の範囲を示せば、網掛けした範囲となる。地番一〇九・一一六番が校庭であろう。その北側の地番一一一番あたりに校舎は建てられていたと思われる。校舎の北側や東側に当たる一一〇番は法面であろう。地番一〇五番の西寄りは法面で一〇五番の大部分は崖下の低地に当たると思われる。なお、校庭となっていた一〇九番の旧地番が富士塚一七四〇番であり、これが専門学校申請時の住所表記、中区西戸部富士塚一七四〇番地に当たる。一〇九番の旧地番である一七四〇番、すなわち一七四〇番地で申請されたことが判明する。

図5は現在使用されているコンピューター管理されている公図の原図である。[6] マイラーと通称され、昭和五十四年二月一日に和紙公図をもとに再製されたもので、平成十七年六月一日にコンピューター管理される

にともない閉鎖されている。和紙公図とマイラーの公図を比較すると、久保町と接する一一〇・一一一番の地籍は、和紙公図では比較的直線的に描かれ、一方、マイラーの公図では凸凹した地籍で描かれている。これは字境界をめぐって、境之谷と久保町の間で傾斜地の地籍の置き換えが行われた結果のようだ。法面における地籍であり、実測図ではなく、必ずしも忠実に実状を示す図ではない。現在一〇四番、一〇五番、一〇九番が境之谷公園となっている。その内、一〇九・一〇五番と一〇四番の一部が専門学校の校地であり、さらに現在は民地となっている一一一番および一一〇番も校地であった。言い換えると、境之谷公園の現在「こどもログハウスちびっことりで」の建つ高台が校庭で、同一レベルで道を挟んでつながる民地部分[7]に校舎が建っていたと思われる。ログハウスの北側や元校舎が建っていた高台の東・北側は急斜面の法面で、法面下のグランド部分の半分ほどまでが校地であった。

専門学校最初の校舎

専門学校申請書類に添付された図面（図6）に従えば、校舎は木造平家建で東面して建つ。間口二二間に

図１　横浜専門学校四隣配置図（『神奈川大学史資料集　第三十三集』所収、原資料は国立公文書館所蔵。なお、原図は陰画であるが、反転させている）

申請書類「財団法人横浜専門学校設立許可の件（昭和４年９月20日）」に収録された配置図である。太線で囲まれた部分が校地、左側の校地の境界線近くに逆Ｅの字状に示されたものが校舎である。

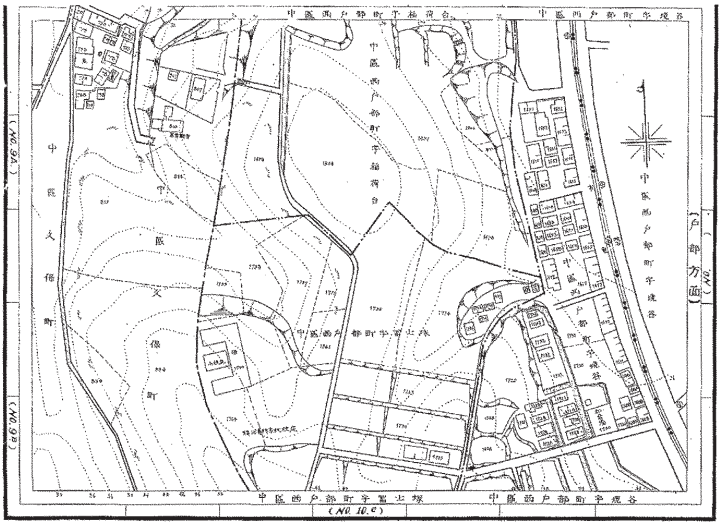

図２　『中区火災保険図』No.10「久保山方面」（横浜市各課文書、横浜市史資料室所蔵）
昭和５年３月15日作成とある。下部の中央左寄りの逆Ｅの字が校舎、その下の広場に「横浜専門学校校庭」とある。

図３　横浜市三千分一地形図『南太田』部分（横浜開港資料館所蔵）
昭和７年11月測図。図の中央上寄りに「横浜専門学校跡地」と加筆した辺りの舌状の平坦地が専門学校跡地に当たる。地形の様相がよくわかる。

図４　「和紙公図」（横浜地方法務局所蔵）

「和紙公図」に元校地境界線および校舎位置を四角く囲んで追加して示した。「和紙公図」は字境の谷を一枚の和紙に描いた地籍図であるが、複写の都合上、右辺と下辺が欠落している。

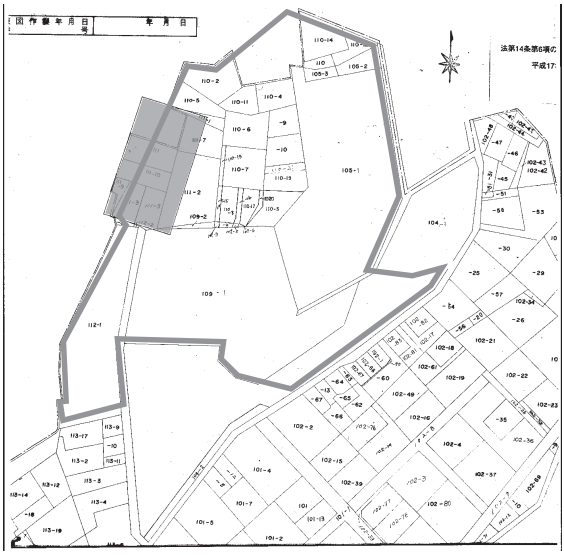

図５　現公図（マイラー）（横浜地方法務局所蔵）

現公図に元校地境界線および校舎位置を復原追記した。

奥行四間半の主体部分の南端背後に四間半に七間半、北端背後に四間半に八間半を突き出す。すなわち四間半幅にコの字に建物を折り曲げたごとき配置である。さらに、コの字に配された、その中庭に相当する部分に五間に六間半ほどの附属屋を配した構成になっている。コの字に配された校舎は正面の間口二二間の中央に二間幅の出入口を設け、通土間を通して中庭に通じるようになっている。通土間の右（北）側には「講師室」「理事室」「事務室」（それぞれ六坪五合）、「応接室」（三坪）からなる専門学校の管理部門がある。南端に背後に突き出た部分を合わせて六〇坪の大きな「講堂」を配し、講堂と通土間で挟まれた箇所に二二・五坪の「教室」、管理部門の北側に二七坪の「教室」北端背後の突き出し部分に三八・二五坪の「教室」が置かれている。「教室」「講堂」には中庭沿いに付けられた土庇から出入口が設けられている。「講堂」「教室」には「講壇」「教壇」が置かれ、各部屋とも床は板張り、天井は「タイガーボード張」、壁は漆喰塗りで腰まで竪羽目、さらに木部はペンキ塗りである。管理部門の「講師室」などの諸室の仕上げは床が板張りの上にリノリューム敷、天井がベニヤ板格天井、壁が漆喰塗りで腰まで竪羽目で木部ペンキ塗りである。

中庭の附属屋は校舎通土間から続いて建物中央を通る土間廊下を挟み北側に「小使室」など、南側に「学生控室」があり、突き当りに便所が設けられている。「学生控室」は二間に五間の細長い土足のコンクリートの叩きの部屋である。両側長手に「コシカケ」、土間中ほどに石製の炉が設けられていて、その時代を感じさせる。一方、小使室は流しや石製の炉を据えた土間（二坪）に畳敷きで押し入れを持つ八畳の和室からなっている。小使室に続けて奥に二・二五坪の「講師便所」を設けている。突き当りの「便所」は学生用とみられ、一〇個の小便器、四個の大便器が並んでいる。

校舎正面中央の玄関部分は、二重壁として玄関を象徴的に示すように山型に壁面を突き上げている。この壁面に出入口をアーチ型に繰り抜き、アーチ上部に水平な庇を付け、さらにその上の山型の中央部分に菱格子窓を穿っている。校舎外壁面は色入りモルタル塗り仕上げで、山型壁の両端肩部分笠木や壁面最下端の地覆を人造石洗い出しで飾っている。以上のように、豪華というほどではないものの、当時の新設専門学校と

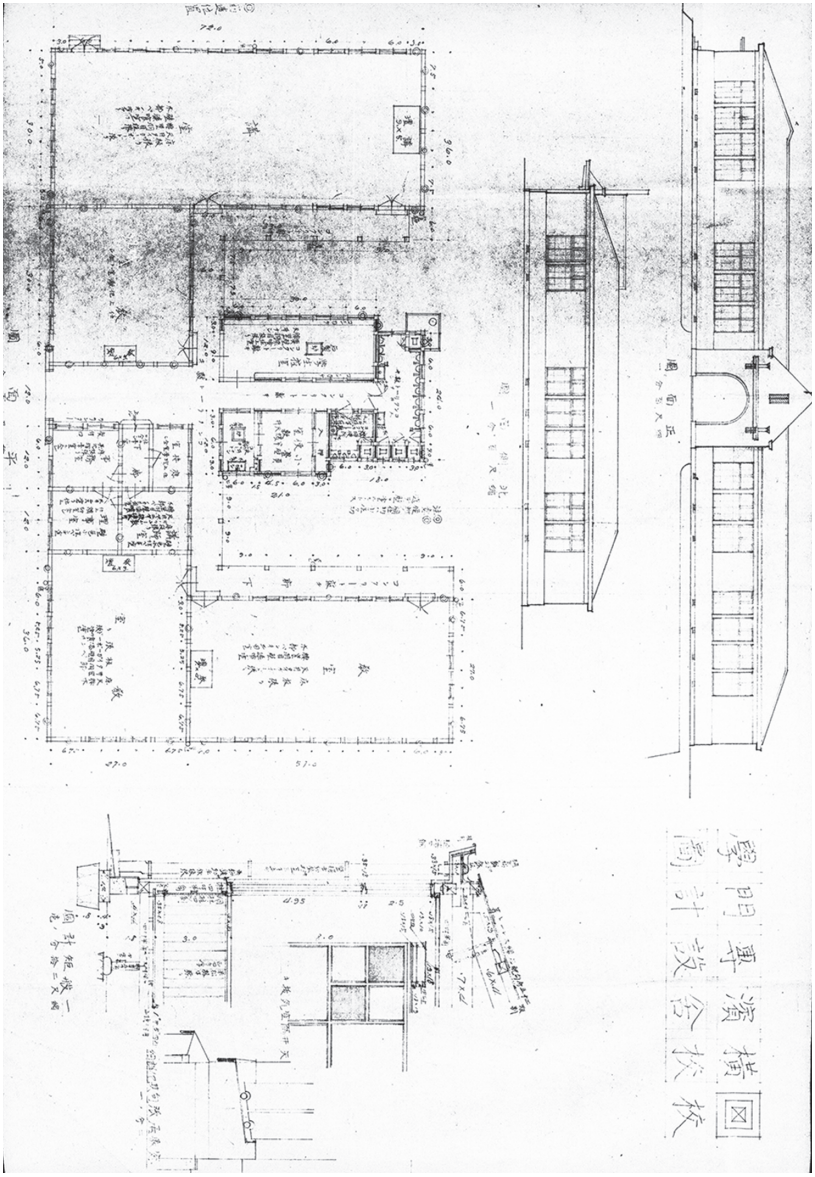

図６　横浜専門学校校舎設計図（『神奈川大学史資料集　第三十三集』所収、原資料は国立公文書館所蔵。なお、原図は陰画であるが、反転させている）

申請書類に添付された校舎設計図である。下（左）に平面図、上（右）に立面図が描かれている。上の立面図が正面で、中央玄関まわりは山型に飾られている。

してはそれ相応の施設であったものと思われる。

ところが、校舎が竣工してたった一年しか経たないにもかかわらず、突然にも神奈川区六角橋町字宮面に移転することとなる。[8]

当時宮面土地区画整理組合長であった山室周作の日記によれば、昭和四年十一月十二日に米田吉盛が山室を学校敷地の件で訪ねており、移転に向けて具体的な動きが始まっていたことが判明する。[9] 移転の動機を「学校を拡張するためには、あまりにも狭隘であった」とされているが、そのような事情は富士塚に校地を開いた当初から分かっていたはずであり、いかにも唐突である。[10] 当然、表に出ていない動機はほかにあったものと思われるが明らかではない。

六角橋キャンパス移転時の様相

横浜専門学校の六角橋移転のための「位置変更願」は昭和五年一月三十日付けで、文部大臣に宛てて、財団法人横浜専門学校理事米田吉盛名で提出され、同年三月七日に認可となっている。しかし、校舎建設は遅れ、六角橋に建った最初の校舎である「第一校舎」は同年五月十日に竣工、次いで「第二校舎」は同年九月に建ったようだ。[11]「事務室棟」もこの時期に建てられているが、正確な日時は不明である。[12]

図7は昭和九年当時の六角橋キャンパスの配置図である。この図をもとに六角橋移転初期の校舎の状況をみてみよう。昭和五年当時は正門を西に向かって入った正面に木造平屋の「事務所棟」、左側に「第一校舎」、右側に「第二校舎」が建っていた。「事務所棟」は木造平屋建てで東面して建つ。[13] 間口一〇間に奥行三間で南側面後方寄りに三坪分突き出している。正面中央に主出入口を開き、入口を入ると矩折の土間で、この土間は奥に通土間となっている。通土間南側に沿ってカウンターがあり、カウンター内はオープンな事務室、さらに個室となった三坪と三・七五坪の事務室がある。通土間の北側には大きな矩折平面の事務室（一六・五坪）と三坪ほどの応接室が並ぶ。

「第一校舎」は四〇〇坪ほどの木造二階建で、一段高い位置に北面して建つ。玄関を入ると南北に中廊下を通し、玄関右脇および廊下突き当りに階段室を設け、一・二階とも中廊下で両側に教室を設ける。

「第二校舎」は矩折の平面形の木造平屋建てであった。当初の詳細な様相は不明だが、矩折の内側に土間

の外廊下を設け、各教室に至るようになっていたようだ。さらに、矩折に囲まれた内側に「学生控室棟」も建てられている。そのほか「第一校舎」の裏側に独立した便所が造られ、これに繋げて渡り廊下が設けられていた。なお、当時は二四・五坪～六〇坪の十二室の教室で構成されていた[14]。以上のような様相が、昭和五年の校舎の概要である。

昭和七年になると創立四周年を記念して、「第一校舎」の斜め後方（西側）に「大講堂（第三校舎）」が建設される。「第三校舎」は木造二階建ての建坪二〇〇坪ほどの建物で、昭和七年五月に着工し、十月に竣工している。内部には大講堂・図書室などがあり、大講堂は一・二階吹き抜けた一三〇坪ほどの大きな講堂であった。そして同年十月二十七日には時の文部大臣鳩山一郎などを招き「講堂落成記念講演会」が開かれている[15]。

昭和九年には、十年からの定員変更を目指してか、「第二校舎」に二階を増築、また「事務所棟」の背後に小さな別棟を継ぎたす工事が行われている。図7はその際の図面である。第二校舎の増築は平家であった第二校舎の上部に総二階で二階部分を載せる増築工事

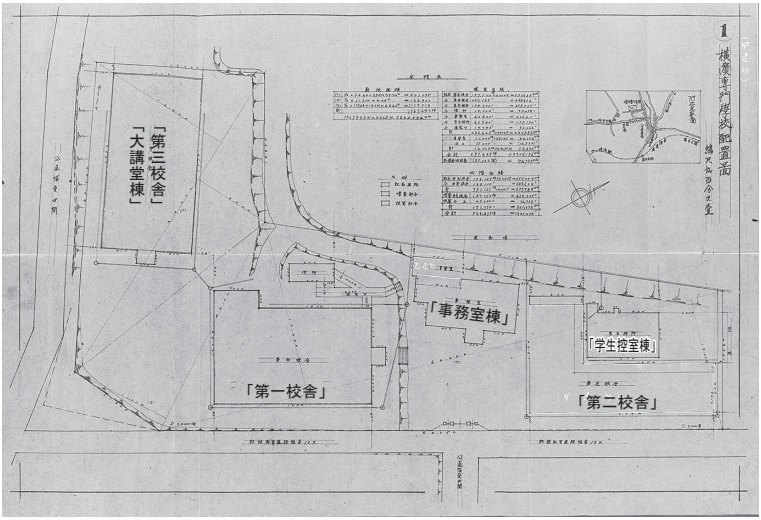

図７　昭和９年　横浜専門学校配置図（神奈川大学資料編纂室所蔵。原図は陰画であるが、反転させている）

この配置図のうち左寄りの「第三校舎」を除く、「事務室棟」・「第一校舎」・「第二校舎」（ただし、平家）・「学生控室棟」の構成が六角橋移転当初の様相である。

である。その結果二階に五室の教室が増えている。「事務所棟」の増築は五間半に二間の別棟を既存の「事務所棟」に接して建てられたもの。内部は事務室二室と道具類置場一室からなる。

昭和十三年五月に「応接室棟」と「物置」の建築申請された際に添付された配置図をみると「事務所棟」の後ろに「応接室棟」が、第二校舎の北側に「物置」が予定されている。注目すべきは「物置」のさらに北側に「柔剣道場」や「小使室」が既に建てられていることである。昭和九年の時点ではまだなかった建物が、建築年代は不明だが、昭和十三年五月の時点では既に存在していたことが判明する。すなわち、第二校舎の北側に九年頃に、「柔剣道場」や「小使室」が建てられ、[16] さらに昭和十三年に「応接室棟」などが新築された。

写真１　旧「事務室棟」
（神奈川大学資料編纂室所蔵）
昭和15年頃の写真。「事務室棟」の玄関部分。背後に「第一校舎」・「第三校舎（大講堂）」がみえる。

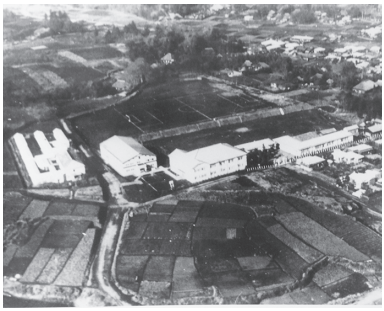

写真２　空撮による校舎全景
（神奈川大学資料編纂室所蔵）
「第三校舎（大講堂）」が建てられ、「第二校舎」を２階建に増築する工事は行われていない昭和７年頃の写真ではないかと思われる。「第三校舎」脇の道を挟んだ南側に建てられている建物は寄宿舎である。なお、寄宿舎については本稿では触れなかった。

工学三科新設にともなう新増築

昭和十四年四月に機械工学科・電気工学科・工業経営学科の工学系三科が新設された。そのため、十四年以降には三科新設に関わる工事が集中している。工学系では欠かすことができない実験室、すなわち「電気工学科実験室棟」（一四五坪）、「機械工学科実験室棟」（一〇八坪）が五月二十七日に建築認可され、九月に竣工している。二棟はいずれも木造平屋建瓦葺の建物

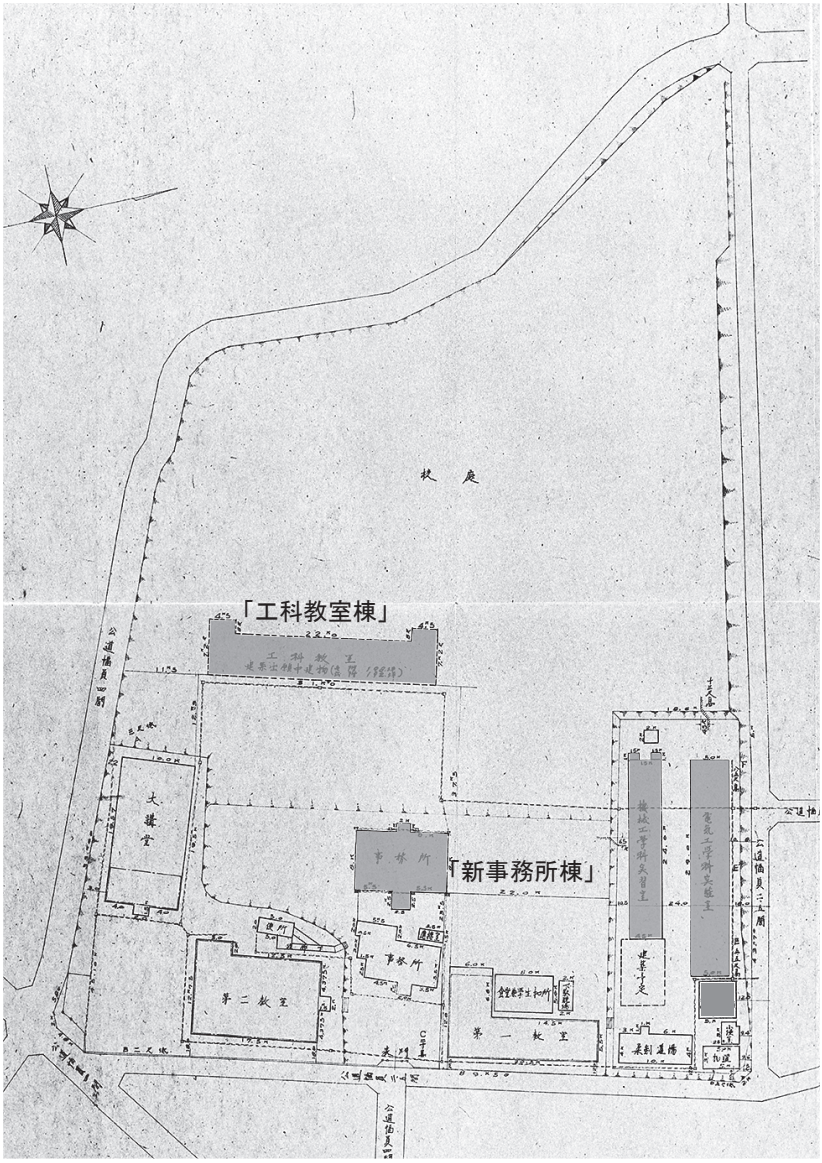

図８　昭和14・15年　横浜専門学校配置図（神奈川大学資料編纂室所蔵。原図は陰画であるが、反転させている）

建築出願中建物として「工科教室棟」が描かれ、新旧の「事務所棟」が同時に描かれている。

で、校地の北境界沿いに東西棟の「電気工学科実験室棟」、その内側（南側）に「機械工学科実験室棟」が平行に並んで建てられた[17]。さらに「電気工学科実験室棟」の東側に「変電室・高圧実験室棟」（二五坪）が建てられるにあたり、妨げとなった「柔剣道場」は南方寄りに曳家され、それと入れ替えるように「小使室」・「物置」など既存の付属屋の移動も行われている。また、同年九月には「工科教室棟」が建築申請されている。「工科教室棟」は間口三一間に奥行六間の長大な南北棟の木造二階建切妻造瓦葺の建物で随所に控え壁を設けている。内部は背面（西側）に片廊下を設け廊下に沿って教室を割り付けている。一階は一六・三坪の部屋が二室、一八・七坪の部屋が六室とあわせて八室の教室が並び、二階は三〇坪ほどの五教室が並ぶ。「工科教室棟」は当初の事務所棟の背後に新たな事務所棟を建設することを見越して、新たな事務所棟予定地および大講堂の後方（西側）に新築された。時節柄とはいえ、申請の参考事項として「屋根瓦ノ全部及建築用材ノ約半分ハ既存ノモノヲ流用スルコトトスル」と書かれるような質の建物であったようだ（図8）。

昭和十五年には新たな「事務所棟」が建てられる。十四年十二月二十一日に建築認可が下りているが、設計変更が加えられ再度認可が下りたのは十五年一月である。木造二階建寄棟造天然スレート葺の建物で、旧事務所棟の背後に東面して建てられた。新しい「事務所棟」も建設理由に「定員増加ニ伴ヒ従来ノ拡張計画ヲ実施セシトスモノ」とあるように工科の新設に伴うものである。間口一三・五間（八一尺）、奥行八間（四八尺）の総二階で、正面中央に車寄せを設け玄関とする。正面の車寄せには入母屋屋根を突き出し、さらに二階中央軒先を切妻様に切り上げ、外壁をモルタル人造石仕上げとし、縦長の上下窓を配して飾っている。内部は、玄関から裏口および各部屋へ至るコンクリート土間を通し、突き当りに二階に登る階段室を設ける。土間左手（南側）にカウンターを突き出した事務室、奥に工学科研究室・宿直室があり、右手は階段室前に扉を開く受付室を経由して正面側に教授室、突き当りに教練科、背面側に応接室がある。二階は中央南北に中廊下を通し、正面側を三室、背面側を四室に分け会議室や研究室に割り当てている。図9は設計変更前の様子を示しており、変更後は正面側の間仕切り

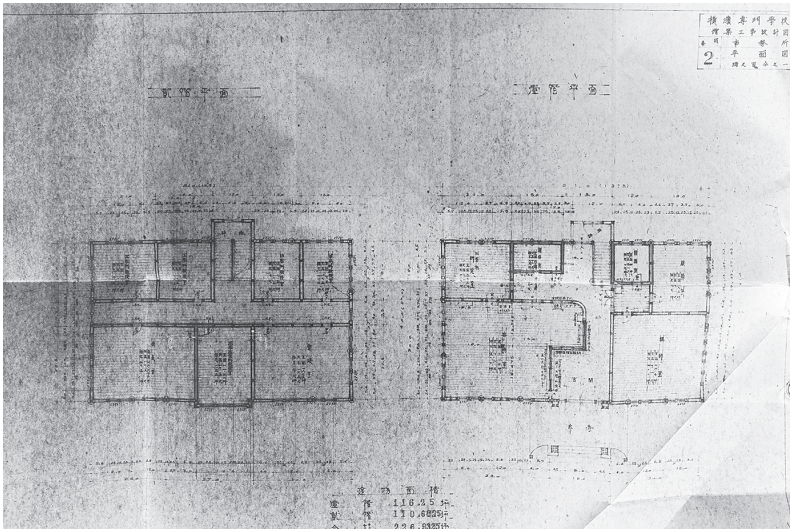

図９　新事務所平面図（神奈川大学資料編纂室所蔵。原図は陰画であるが、反転させている）

右が１階、左が２階である。１階は正面から背面に至る土間の左側に事務室、右側に教授室などが並ぶ。

位置を多少変更し、両側を大きな部屋にして、「会議室」と「校長室」に充て、中央の部屋を高等商業科研究室としている。一方、背面側は北寄りに貿易科研究室・法学科研究室、南寄りに工学科研究室を２室としている。[18]

また、旧「事務室棟」を移築して「物理化学教室棟」（五八坪）・「応接室棟」などに改築している。

昭和十六年七月には、「武道場棟」と「食堂棟」の新築、「教授室」と「実習室」増築の申請がなされ、八月に認可されている（図10）。これらの工事も工学

写真３　新「事務室棟」
（神奈川大学資料編纂室所蔵）

昭和23年の撮影だとされている。２階建の新「事務室棟」の正面中央に車寄せを設けている。

三科の新設に関わるものである。新築を要する理由の項によれば、十四・十五年にかけて増築を行ったにもかかわらず、さらに実験室の増築が必要となり、実験室の建設を行うにあたって「電動力及位置ノ関係上従来使用セシ既設ノ武道場（「柔剣道場」）ヲ之ニ充当セザルヲ得ザル事情ニ有之候」とあり、新たな「武道場」を新築せざるをえないとしている。また、その他の建築物は定員増にともない必要な最小限の施設だとしている。いずれにせよ全体を見通した計画がなく、その場しのぎで、増改築が繰り返されていることがよくわかる。「武道場」は直角三角形のごとき校地の西北の隅に新築された。木造切妻造瓦葺平家建で、外壁は下見板張。一二間に六間の演武場を中心に正面中央に玄関、背面南寄りに剣道道具置場・柔道道具置場・便所・仕丁室などの諸室を張り出す。演武場の内部は板張りで、内壁は腰板を張り上部はモルタル塗り。用途として「本建物ハ（武道場）学生生徒ノ心身ノ鍛錬及体位ノ向上ニ資スルモノ」とあり、当時の時代背景を思わせる。一方、「食堂棟」は「事務所棟」と「機械実験室棟」との間に新築された。木造切妻造瓦葺平家建で東面して建つ。間口一〇間に奥行五間で正面中央に出入口を設け、西北隅に設けられた二間に三間の賄室を除けば広い学生食堂である。外壁は竪羽目で二間ごとに控え壁を付ける。内壁は漆喰塗り、床は板張り、天井はテックス張である。賄室には学生食堂に向けてカウンター窓を開き、外壁の各窓は高さ六尺（二段）回転式の窓であった。学生のための厚生施設にも多少の配慮をしていたということか。

「工科教室」の増築は既存の「工科教室棟」に防火壁を設けて繋げ、一八間ほど北方に伸ばす工事である。木造二階建切妻造瓦葺で、四間おきに控え壁を設け補強している。既存の間口三一間の奥行六間にさらに間口一八間に六間を繋げるため、一階のつなぎ目には二間幅の通路を設け通り抜けできるよう配慮している。構成は既存の「工科教室」と同様に西側に片廊下を設け、廊下沿いに三教室を並べ、突き当りを製図室としている。二階は大きな製図室を二間幅の控室を挟んで二室並べる。製図室の必要に迫られ急きょ増築せざるを得なかったようだ。

また、「実習室」の増築は「機械実習室棟」を東に四間継ぎ足して延長する増築工事である。「教授室棟」の増築も「応接室棟」の後方（西側）に繋げて建てら

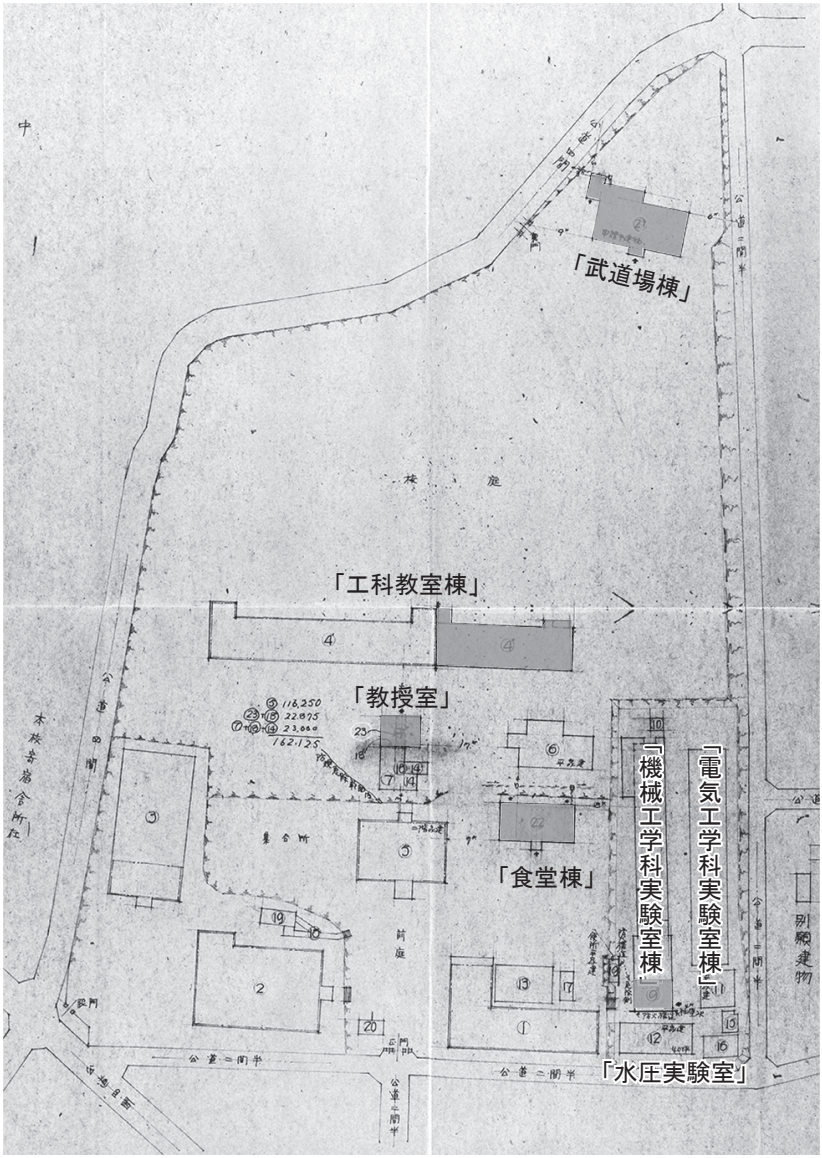

図10　昭和16年　横浜専門学校配置図（神奈川大学資料編纂室所蔵。原図は陰画であるが、反転させている）

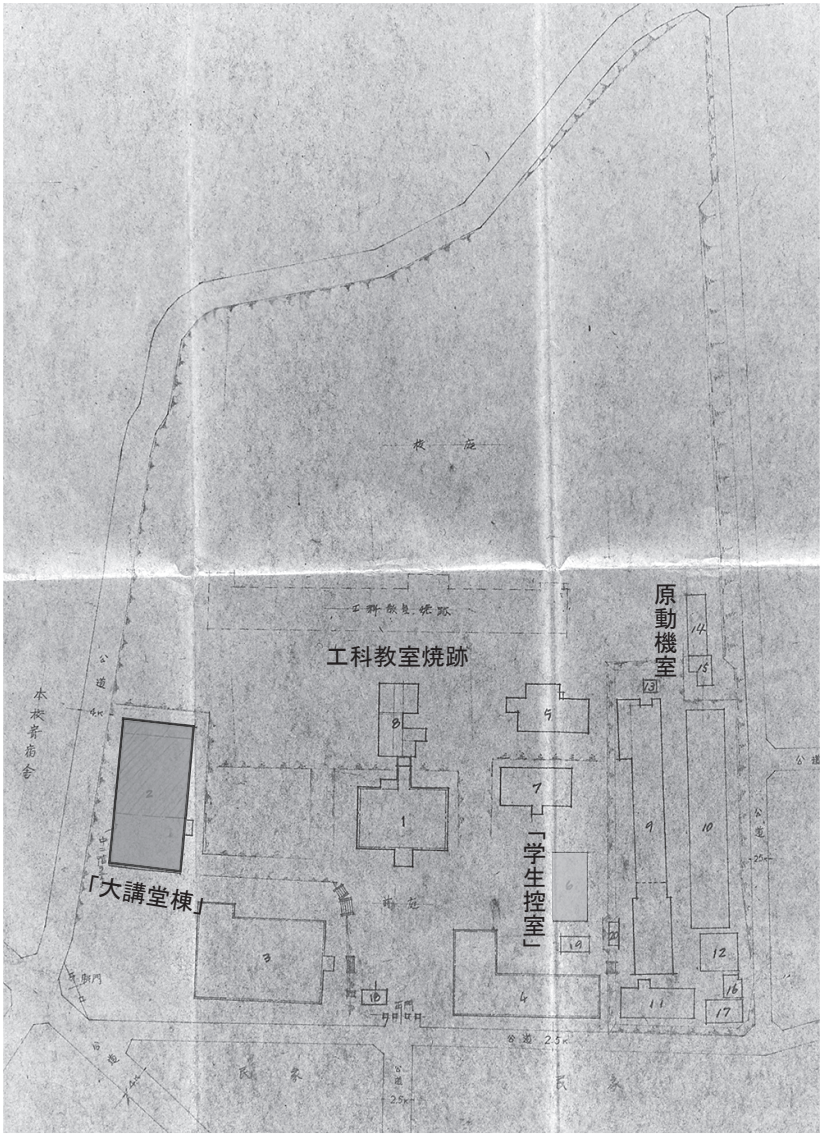

図11　昭和23年　横浜専門学校配置図（神奈川大学資料編纂室所蔵。原図は陰画であるが、反転させている）

れたもの。木造平家建切妻造瓦葺で五間半に四間の規模で中央を貫く九尺の廊下の両側に四坪大の教授室を並べたもの。いずれもその場しのぎの感を否めない、ともかく工学三科開設を機にそれらに対応すべく、充実を図った結果であるといえよう。

しかし、昭和十六年末の太平洋戦争勃発などの戦争の激化にともなって、その後は学校施設の拡充はほとんどなしえなかった。

空襲・敗戦そして大学昇格へ

横浜市内のほとんどを焼き尽くした昭和二十年五月二十九日の横浜大空襲の五日前、五月二十四日の空襲で専門学校は「武道場」・「工科教室棟」を全焼、「大講堂」も大破するという大きな被害をこうむった。その後、八月十五日に至り日本は無条件降伏し、敗戦となる。敗戦後、占領軍の横浜進駐にともない校舎は九月二日から十二月三日まで占領軍兵舎として接収されるところとなる。その間、大倉精神文化研究所や神奈川県立横浜第二中学校（現、横浜翠嵐高校）を借り受け仮校舎とせざるを得なかった。接収解除後も荒廃が甚だしくすぐに戻ることができず、六角橋への復帰は

写真４　空中写真、横浜市神奈川区（国土地理院所蔵）

米軍が1947年７月24日に撮影した横浜市神奈川区の空中写真の横浜専門学校辺り。戦後、間もないころの校地の様子がよく分かる。空襲により焼失したという「工科教室棟」「武道場棟」はなく、被害の様子はわからないが「第三校舎」は存在しているようだ。

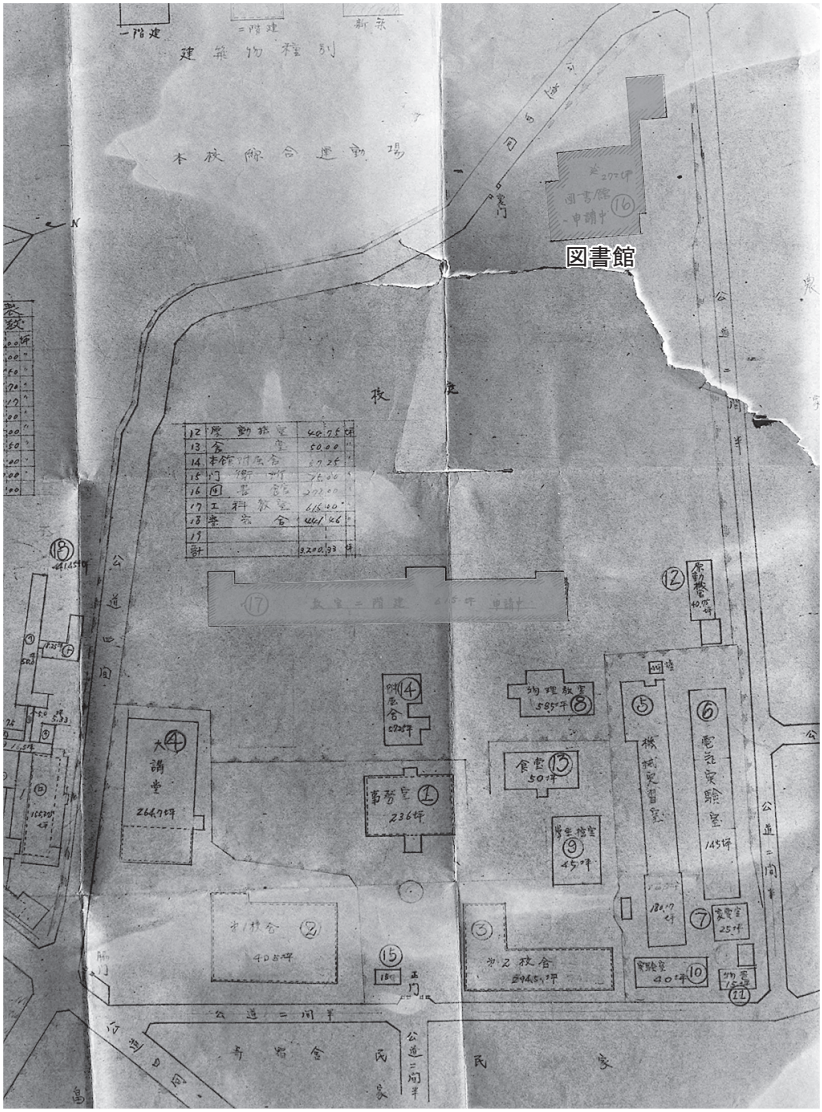

図12　昭和24年　横浜専門学校配置図（神奈川大学資料編纂室所蔵。原図は陰画であるが、反転させている）

二十一年二月になってからだという。[19]

戦後最も早い校舎改築に関する書類は、昭和二十三年四月二十二日付け建築申請書である。この書類は「大講堂」の修理を行うための申請書で、書類によると申請を必要とする理由として「本講堂は、建築以来相当年数を経ていた所、空襲による爆撃の影響受け、建物に損傷を来し、使用不可能の状態にあるな□、修繕を施し、授業及行事に使ひたい」とある。この認可を六月十五日に得て、修繕工事が実施された。この申請書に添付された配置図（図11）には焼失した「武道場」は描かれてなく、「工科教室焼跡」が破線で図示されている。これらのことから、敗戦後まず手を付けられたのが「大講堂」修繕であったことがわかる。なお、この図によると矩折平面の「第二校舎」の内側にあった「学生控室」が無くなっており、「第二校舎」と「食堂棟」の間に「学生控室」がある。この改変がいつなされたのかは不明だが、戦時中に空襲に備えるために「第二校舎」に近接していた「学生控室」を移築したのかもしれない。また、「原動力室」も加わっている。

昭和二十四年四月には新制神奈川大学が誕生する。[20]大学設置認可申請が行われていた時期の様子を示していると思われる配置図（図12）がある。この図によると「図書館」と新「工科教室」が申請中として、旧武道場跡・旧工科教室棟跡に描かれている、実施された建物とは若干様子が異なっているが、この時期同時に二つの建物が計画されていたようだ。また、昭和二十五年八月二十五日作成の新「工科教室棟」申請のための計画配置図によれば、旧「武道場」跡に「図書館」が既存の建物として描かれている。昭和二十四年九月に図書館落式が行われており、この時期に竣工したようだ。「図書館」については図面や写真があり、その概要がわかる。「図書館」は閲覧室棟と書庫棟から構成され、二つの棟を前後に渡り廊下で繋いでいた。閲覧室棟は木造平家建で東面して建つ。間口一二間奥行六間の主体構造の北西隅に階段室と事務室を張り出し、背面南寄りに便所を突き出す。正面中央を窪めてポーチを取り、ポーチには中央柱の両側に九尺幅の両開き扉を開ける。一階内部は座席数二二〇席の大きな閲覧室である。二階は南北に貫く中廊下の前後にそれぞれ八室の研究室を設ける。背後に張り出した事務室から、さらに渡り廊下で繋がる書庫は五間に六間四方

の総二階である。かつて「大講堂」内に図書室が設けられていたが、本格的図書館としては専門学校・大学を通して初めてのもの。大学昇格に不可欠な施設である図書館があわただしく建設されたようだ。

昭和二十五年には新「工科教室棟」申請のために八月二十五日に図面が作成されている。[21] この図面によると空襲で焼失した旧「工科教室棟」跡に、ほぼ同規模の建物が計画されている。詳細は不明だがこれまですべての建物は木造であったが、初めて鉄骨造の二階建で、清水建設によって建てられたようだ。一階が二七〇坪、二階も同じ二七〇坪、延床面積五四〇坪であった。この建物は新八号館（現、八号館）が建てられるまで残ることになる。さらに昭和二十七年には図書館前（東斜め前方）に木造二階建の「工学部・実験室棟」が建設される。同年七月に、「神奈川大学整備拡張計画」が発表され、その後、山口文象率いるRIA建築綜合研究所によるキャンパス整備が始まることになるため、キャンパス整備前の最後の建物が「工学部・実験室棟」である。しかし、この建物は不運なことにキャンパス整備計画最初の建物である三号館が竣工する直前の昭和三十年一月に焼失することになる。以上のように「神奈川大学整備拡張計画」に従って再開発される直前の大学校地の様相は図13のようであった。昭和五年の移転以来、時代状況に恵まれなかった

写真５　図書館
（神奈川大学資料編纂室所蔵）
専門学校･大学を通して、最初の図書館。

写真６　「工学部実験室棟」
（神奈川大学資料編纂室所蔵）
「工学部実験室棟」は昭和27年３月竣工し、30年１月に焼失している。「神奈川大学整備拡張計画」前の最後の本格的建物だが、整備計画による最初の建物（三号館）が竣工した時には既に消滅していた。

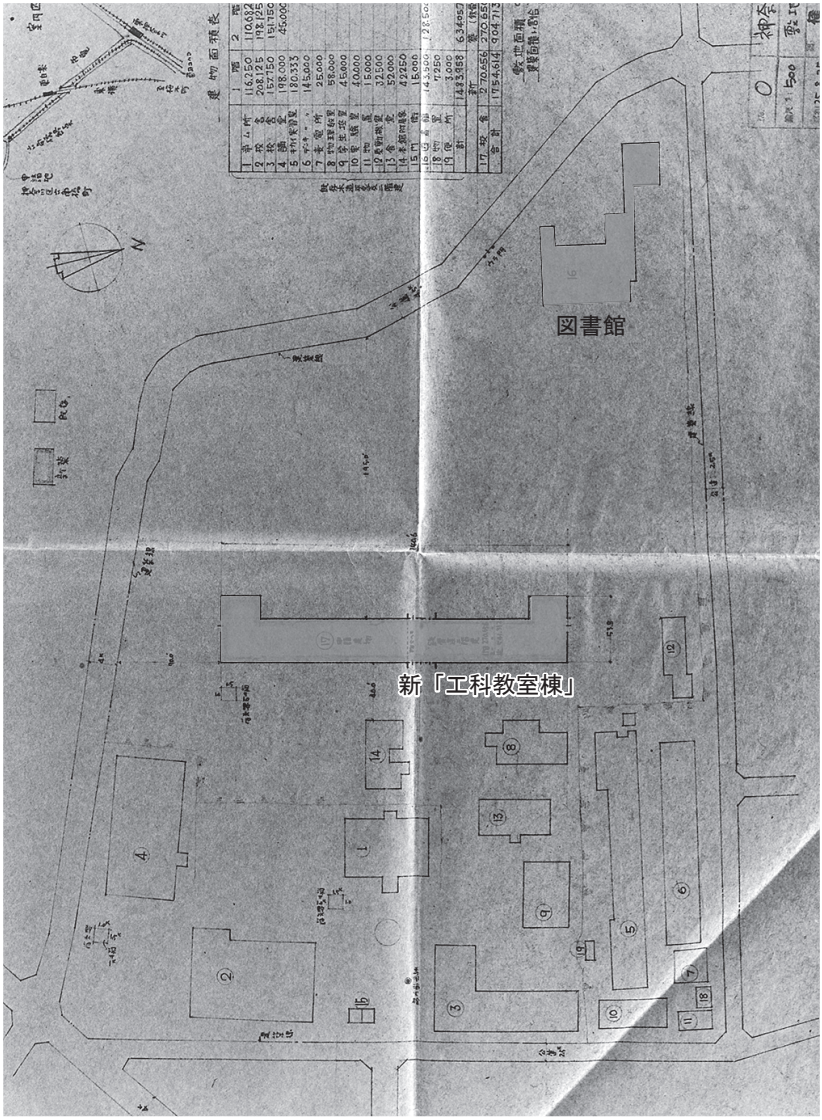

図13　昭和25年　横浜専門学校配置図（神奈川大学資料編纂室所蔵。原図は陰画であるが、反転させている）

こともあり、その都度その都度、必要に迫られて増改築を積み重ねた結果である。大政治家・大実業家などをバックに成長した大学とは異なり、無名であった人々の努力の積み重ねの上に成立した新制大学のありよう。校地の変容過程は横浜専門学校・神奈川大学の歩みを象徴しているようにみえる。

おわりに

昭和三十年三月、神奈川大学キャンパス整備計画[22]の皮切りとなる三号館が竣工する。三号館はインターナショナルスタイルでシンプルイズベストの典型例であった。山口文象が自ら設計・作図した図面が図14、15である。いかにも美しい。RIAによるキャンパス整備にともなって建築された新建築群の中においても白眉の建物であった。しかし、すでにない。

図面収集整理に際し、石原 丈君にお世話になった、記して感謝する。

註

（1）申請書添付図面は、神奈川大学資料編纂室編『神奈川大学史資料集』第三十三集掲載の「国立公文書館所蔵横浜専門学校資料」からとったものである。資料編纂室所蔵の建築図面は、従来より所蔵されていた図面に加えて、平成二十八年度はじめに施設部廃棄予定の大量の図面群の中から、資料編纂室に移管されたものが含まれている。そのため、すべての資料が網羅されておらず、かつ現時点では整理途中である。今後、新たな資料が発見される可能性もある。

（2）境之谷公園内に「神奈川大学発祥之地」の記念彫刻が立てられている。その由来文には「神奈川大学は 米田吉盛が昭和四年この地を卜して創立した横浜専門学校にはじまる」とされている。

（3）申請書添付の『財産目録』に「門及校舎周囲の塀、一〇〇〇円」とあり、門および門扉は造られたのではないかと思われる。

（4）『中区火災保険図』（横浜市各課文書）横浜市史資料室所蔵。

（5）和紙公図には富士塚の字名はなく、地番も変更後の地番が註記されている。横浜地方法務局蔵。

（6）平成十七年六月一日にコンピューター管理となったために閉鎖されている。

（7）公園内に建つ「神奈川大学発祥之地」記念彫刻の背面（北側）に辺りに校舎は建っていたと判断される。

（8）申請書類に添付された「財産目録」には「第一期校舎建

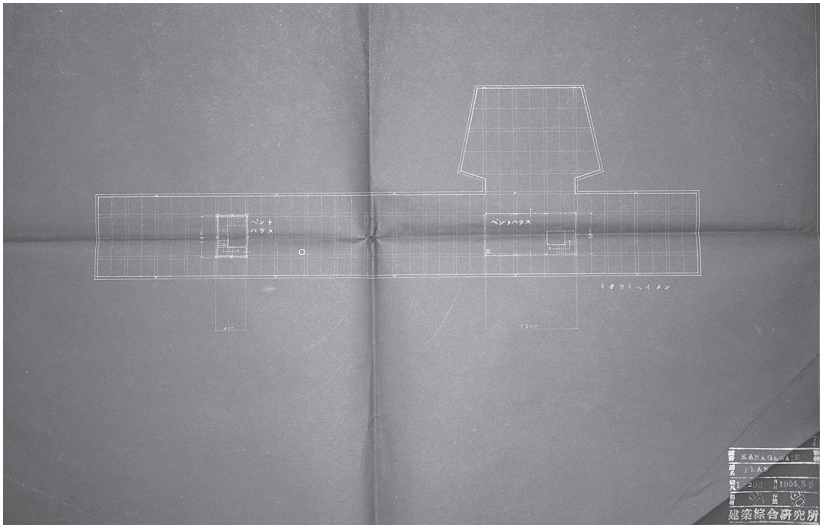

図14　山口文象による三号館平面図（神奈川大学資料編纂室所蔵）

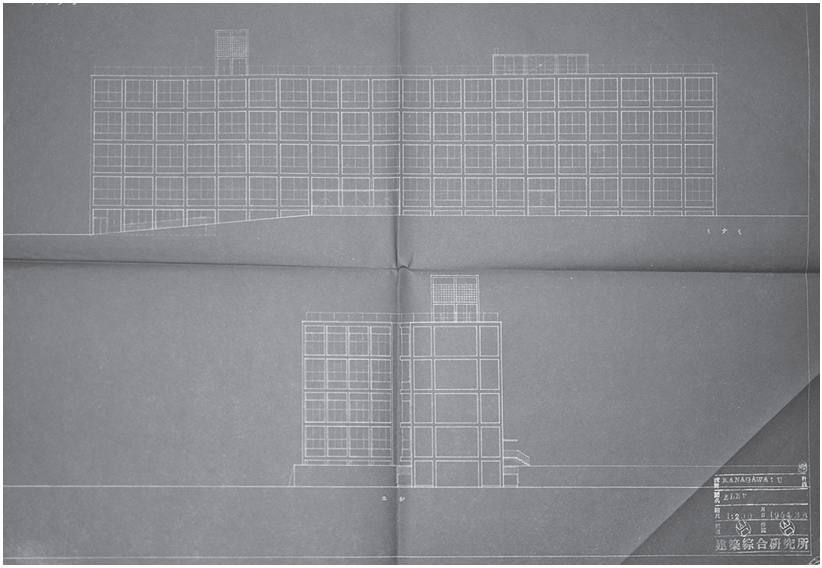

図15　山口文象による三号館立面図（神奈川大学資料編纂室所蔵）
担当・作図の欄に山口の印が押されている。

築物」とされており、申請時は第二期校舎の建設も目論まれていたのではないかと思われる。

(9) 津田良樹「土地に刻まれた歴史からみた横浜専門学校・神奈川大学―土地所有関係を中心に―」(『神奈川大学史紀要』創刊号、二〇一六年三月)

(10) 『神奈川大学五十年小史』(昭和五十七年五月十五日)によると「国からの払い下げの材料を利用した粗末なもので、壁はボール紙という、およそ専門学校の校舎らしからぬものであった」とされているが、設計図から確認するに、本文に記したように、木造ではあるが決して粗末のものではない。

(11) 竣工年月日は『神奈川大学五十年小史』による。なお、第一校舎と第二校舎の呼称は建築当初は事務室右前方の建物が第一校舎で、左前方の建物が第二校舎である。昭和一〇年三月に申請された「校則及生徒定員変更認可申請書」に添付された図面では当初と同様な呼称となっているが、図6以降の建築図面では第一校舎と第二校舎の呼称が入れ替ることが多い。しかし、本稿では竣工順を尊重し、当初の呼称で統一する。

(12) 財産目録(昭和十五年三月三十一日現在)の建物の一覧表に記載された建築年月によると第一校舎・事務室は昭和五年四月とされているが、既に示したように第一校舎が竣工したのは五月である。昭和五年七月六日に行われた財団法人横浜専門学校評議会が富士塚で行われていることからみて、早くて七月中旬以降だと考えられる。

(13) 事務室棟は、第一校舎や第二校舎などと異なり前面道路に対し若干軸線をずらせている。なぜずらせる必要があったのかは不明である。

(14) 昭和五年四月二日「校則変更申請書」『神奈川大学史資料集』第七集二十四頁

(15) 『神奈川大学五十年小史』四十六頁

(16) 写真2によると、「大講堂」が建ち、「第二校舎」の二階増築がなされていない段階で「柔剣道場」らしき建物が存在することが分かる。

(17) 実験室はできたものの「時局による生産機材制限の煽りを喰らひ工場内部の装置が遅れ、其の為〃工場はできたが実習は出来ぬ〃(『横専学報』第八七号、昭和十四年十一月二十五日付)の状態で実習が始まったのは十一月であったようだ。

(18) 建前である文部省提出書類には新設した工科の部屋に充てるとし、実質的には学内事情を優先した結果かもしれない。

(19) 『神奈川大学五十年小史』一〇三頁

(20) 昭和二十四年二月二十一日に第一部、三月二十五日に第二部が設置認可となる。

(21) 「清水建設株式会社設計部」と印刷された用紙に描かれ、昭和二五・八・二五と明記されている。

(22) 「神奈川大学整備拡張計画」以降のキャンパス計画については別に論じる必要があろう。